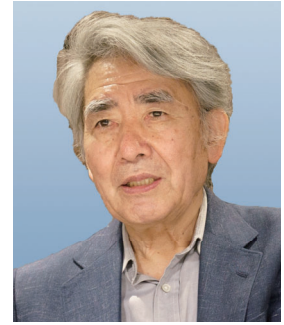


# 食草園って知っていますか？

JT 生命誌研究館  
館長

永田 和宏



私はいまJT生命誌研究館に勤めているが、館長室は四階にあり、廊下を隔てて、天井のないオープンスペースがある。小さな空間だが、一種の屋上庭園になっており、そこに何種類かの草花と小さな木々が植えられている。

これが単なる屋上庭園と異なるところは、食草園として整備されているところにある。食草と言っても、人間が食べるのではない、蝶々のための草花なのである。正確には、蝶々の子供たち、幼虫が食べるための草花なのである。

蝶々の親は花の蜜を吸うことはあっても、葉っぱを食べるわけではない。しかし幼虫はもっぱら葉っぱだけを食べて育つ。それは誰もがご存じだろうが、実は幼虫たちには食べられる葉と食べられない葉があることはご存じだろうか。だから、親としては、適当な葉っぱに卵を産んでおしまいという無責任は許されない。親は、

子供たちが食べられる葉っぱにしか卵を産まないのである。

私どもの研究館には四つの研究室があるが、その一つのラボの研究テーマがこの蝶々の親による食草の選択であり、その機構の研究なのである。

親はどのようにして子供が食べられる草を見分けるのか？母親は、葉っぱに叩いて、まず前脚で葉っぱを叩く。前脚の先端部には味覚細胞があり、そこで葉っぱを叩くことによってかすかに放出される化学物質を感じ取る、いわば「味見」をするのだと言う。これをドラミングと言うが、ドラミングをしてこの葉っぱならうちの子が食べられるという葉っぱにだけ、卵を産み付けて、飛び去るのである。

それも蝶々の種類によって、食べられる葉、幼虫の好む葉が異なり、たとえばナミアゲハの幼虫はミカン、キンカン、ユズなどのミカン科の葉っぱ、シジミチヨウの幼虫はカタバミの葉など、かなり厳密に決まっていることがわかってきた。

私どもの尾崎克久研究員の研究によって、これがあると幼虫が食べられないという、忌避物質を親が感じ取っていることなどもわかってきた。

どの蝶々の母親もこうして食草を見分けている。なんとという涙ぐましい母親の営み。

母性とても言ってみたくなる本能だが、こんなことを一つ知るだけで、身近にある草花を見る目が違ってくるのが大切である。

館長室の前の食草園には、研究員や表現部門のスタッフたちが、毎日、どの葉に卵が産み付けられ、どの葉を幼虫たちが食べているのかを観察して、記録し、またSNSなどで発信をしている。「この子は、昨日からこれだけの葉っぱを食べました」などと教えられると、その楽しそうな顔に、思わずこちらの表情もほころぶというもの。

世はどこもかしこもSDGsの大合唱であるが、こんな身近な自然に目を向け、昆虫と植物の共生の実際を目で見て確かめる、そんなところから、ほんとうに大切なSDGsの第一歩が始まるはずである。

## 永田 和宏(ながた かずひろ)

細胞生物学者・歌人

1947年滋賀県生まれ。71年、京都大学理学部物理学科卒業。大学時代から本格的に短歌を始める。森永乳業中央研究所、京都大学胸部疾患研究所に勤務の後、米国NIHに留学。86年、京都大学胸部疾患研究所教授、同再生医科学研究所教授。2010年、京都産業大学総合生命学部学部長等を経て、2020年より現職。日本細胞生物学会会長等、数々の公職を歴任。紫綬褒章、ハンスノイラート賞(The Protein Society, USA)、瑞宝中授章ほか受賞(受章)多数。歌人として、「塔」短歌会前主宰。朝日新聞等の新聞歌壇選者のほか、宮中歌会始詠進歌選者、22年から宮内庁御用掛を勤めている。第40回現代短歌大賞、第29回講談社エッセイ賞ほか受賞多数。